釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔

■中■

雅なかなの世界にたっぷりつかっていきたいと言う広部さん

書道

広部翠月さん（61）

（釧路市鶴ケ岱）

〝かな〟の文化を後世へ

「楽しみながら書く」モットーに

書道界発展に努力

雅な〝かな〟の世界に魅入られ、今ではもっぱら〝かな〟を書き続ける。そこには「かなはほかのどの国にもないもの。平安時代から受け継いだかな文字を守り、後世に伝えたい」という思いが込められている。

これまで道展特選を2回受賞し、今年は全道書道展で2回目の準大賞に輝いた。次回の全道書道展からは審査員を務めることが決まっている。また、今年は釧路書道連盟の50周年や道東書道展の釧路開催など、連盟の幹事長として東奔西走し、釧路書道界の発展に努めてきた。

広部さんの書道との出会いは、札幌に住んでいた小学1年生の時に、釧路でもなじみの深い橋本宇外さん（故人）に習ったのが最初。その後、星野春月さんにかなを習い、もなってきた。

「楽しみながら書く」というのがモットー。漢字は白い紙に黒い墨で書く位置も決められているが、かなは色のついた紙に自分の好きな位置に「ちらす」など自由度が高い。そこが〝かな〟に魅入られているもう一つの理由だ。

絵のセンス生きる書

書を生かすようにデザインし額に入れたりするのが「今すごく楽しい」とうれしそうに話すが、子どものころは習字よりも絵が得意で、将来は絵描きになりたいと思っていたほど。そのセンスが書にも生きている。

2004年8月には、ドイツで音楽を勉強していた娘の美奈さんと「書とピアノのハーモニー」を開くなど新しいことにも挑戦してきた。

「これからもかなの世界にたっぷりつかっていきたい」と目を輝かせる。

（荒井純）

釧路書道界の父である桑原翠邦さんとも出会い、そうした人とのつながりが書道を続ける原動力に

アッパレ君

木崎征夫